

# 学校獣医師 命伝える

## 寄り添い児童の心養う

### 飼育指導で自治体と進む連携

ウサギやニワトリなどを飼っている小学校や幼稚園に出向き、動物との接し方や飼育方法を指導する獣医師の活動が盛んになってきた。「学校獣医師」とも呼ばれる。動物の世話が情操教育に効果的だと、自治体が地元の獣医師会と連携し、動物の飼育指導を授業に組み込んだり、教員向けの研修を実施したりするケースもある。

(片山健志)

「頭をなでてあげて」動物との接し方を指導し「抱くときは前脚の間に下から手を入れて」西東京市立向台小学校。校内で飼っている3匹のウサギを囲み、同市獣医師会に所属する中川美穂子さん(61)はまず、4年生のお母さんたちに

「なんで学校に動物がいるか、考えたことある？」。中川さんの話に、子どもたちは聴き入った。「動物は言葉を話さないでしょう。だからよく見て、困っていないか想像してあげて。相手の気持ち分かる大人になつてね」と説く。

エサとふんで汚れたウサギ小屋の写真を示しながら、「命には休みがない。自分が嫌だと思ったら、毎日掃除してエサと水をあげてください」。齧齧を骨折したウサギの写事も見せた。子どもが抱き上げたが、逃げようとして落ちたことを説明すると静まった。動物から見て人がどれほど大きいか分かってもらうのがねらい。「怖がらせないように、しゃがんで近づいてね」

グループに分かれ、ウサギやウコッケイを抱いてみた。お母さんたちの手ほどきで、タオルを敷いたひざにのせていく。土方宏太君(10)は「ふわふわしてたけれど、緊張していたみたい。(説明を聞いて)動物の気持ち分かるようになる気がする」。

病気にも「冷静」 中川さんらの活動は、市と市獣医師会との委託契約に基づいている。同市では市立19小学校の動物の診療と飼育指導を、同会が担う。07年度の予算は108万9千円。定期訪問は年1、2回だが、各校の希望で飼育小屋の設計の助言などにも出向く。

鳥インフルエンザが問題になった3年前、市獣医師会は各校を回って、鳥が感染していないことを確認、それまで通りの世話を学校に求めた。感染を恐れ飼育をやめる学校が各地で相次ぐなか、同市ではそうした動きは出なかった。「子どもが愛情を持って世話していることを考え、科学的で冷静な対応を」と中川さんは呼びかける。

「ただいのるしか出来なくてほかに何も出来なくて、とても悲しくて、きんちようして、しかも歯がゆかった」 「なんでシルフィーは今ですつとがまんしたんだろう。そうか、ぼくたちや家族に希望をあたえてくれたらいいんだ」 中川さんは、体験したことだから言葉があふれるように出てきている。助けたいという切実な思い、チャボや友だちなどいるんな立場から見ていることが伝わってくる」と語った。



「せむちかい」。ウサギをひき止めて、そっと触れる



ウコッケイを抱いて子どもたちに説明する中川美穂子さん(左上)＝いずれも西東京市の向台小で

## 8区9市で「支援」 教員対象に研修会も

都獣医師会によると、都内の自治体が地元の獣医師会と委託契約などを結び、獣医師が学校で動物の飼育を支援しているのは8区9市(06年2月現在)。予算化していないが、求めに応じて学校訪問するなど協力関係があるところも11区市町村にのぼる。 10年前、埼玉県の学校でウサギが生き埋めにされた事件をきっかけに、獣医師の力を学校に生かそうとの機運が高まり、協力の輪が広がってきた。

たよぶた。板橋区では02年度から、各校の飼育担当教員が飼育方法を教わる「ふれあい動物教室」を毎年6月に開いている。2日間の日程を「初級」「上級」に分け、モルモットやチャボなどと実際にふれあいがら学ぶ。「先生の苦手意識を取り除くのに加え、動物飼育に対する各校の温度差を確認するのにも役立つ」と区教委の担当者は言う。

練馬区も夏休みに「教員研修会」を実施し、エサのやり方や抱き方のほか、小屋の暑さ、寒さ対策などの指導も受ける。同区では、ほかに年4回、各校の先生を集めて同様の指導をしている。

日野市は06年度から、市立小学校と幼稚園のすべてのウサギとニワトリを対象にマイクロチップの埋め込みを進めている。個体を識別し、健康管理に役立てるねらいがある。現在、ウサギ約40匹、ニワトリ約40羽に埋め込み済みだ。 都獣医師会の手塚泰文会長は「命の大切さを伝え続けられ、必ず子どもに返ってくる。活動のすそ野をさらに広げたい」と話している。